

11月24日「やさしい王さま」エレミヤ書 23：1～6、ヨハネ福音書 18：33～40

今日はエレミヤ書から預言の言葉を聴きました。エレミヤは、バビロニア帝国と言う大国に狙われ、ユダの国が危機に陥っていた時代に預言しました。何を告げたのか？ユダの国の救いではありません。裁きと滅亡を告げたのです。エレミヤがユダの王たちに向かって語った裁きの言葉です。

「23：2 あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」エレミヤはユダの国に、神の厳しい裁きを語ったのです。なぜか？それはユダの国が神さまから受けている恵みを忘れ、神さまとの約束を破棄して、自分たちの利益を追い求めたからです。国を牧する羊飼いたち（つまり国の指導者たち）が正義を行わず、群れを滅ぼそうとしたからです！少し前にはこんな言葉があります。「22：13～15 災いだ、恵みの業を行わず自分の宮殿を／正義を行わずに高殿を建て／同胞をただで働かせ／賃金を払わない者は。彼は言う。『自分のために広い宮殿を建て／大きな高殿を造ろう』と。彼は窓を大きく開け／レバノン杉で覆い、朱色に塗り上げる。あなたは、レバノン杉を多く得れば／立派な王だと思ふのか。あなたの父は、質素な生活をし／正義と恵みの業を行ったではないか。」

この頃、王は東の大国バビロニアに対抗するために、西の大国エジプトに貢物を送り、異国の神々を崇めるようになっていました。さらに、朱色の豪華な宮殿を建て、自身の住み家は立派にする一方で、労働をさせられる貧しい者たちにはろくな賃金も支払いませんでした、「22：17 あなたの目も心も不当な利益を追い求め／無実の人の血を流し、虐げと圧制を行っている。」エレミヤはこのため、もはや神はユダの国を省みることはないだろうと言うのです。

国の指導者たちを糾弾し、裁きを語ったエレミヤは当然周囲の人々からは歓迎されませんでした。国の指導者からは迫害され、何度も投獄され、井戸に吊るされたり、殺されそうになりました。余りの辛さに「わたしの生まれた日は呪われよ！」とこの世に生を受けたことを呪ったほどです。けれども、彼は口を閉じることはありませんでした。ユダの国に正義と神の祝福を取り戻すために、裁きを語り続けたのです！

そんなエレミヤが告げた、数少ない救いの言葉が今日のみ言葉です。「23：5～6 見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起こす。王は治め、栄え／この国に正義と恵みの業を行う。彼の代にユダは救われ／イスラエルは安らかに住む。彼の名は、『主は我らの救い』と呼ばれる。」これまでとは全く違う、神さまの正義と恵みの祝福をこの世界にもたらす本当の王さまがやってくる！その方こそ「主は我らの救い」と呼ばれる救い主だと、エレミヤは預言したのです！

この救い主とは誰のことか？もちろん、私たちはそれこそイエス・キリストだと信じています。私もイエスさまこそ確かにエレミヤの告げた救い主だったと信じています。ただ、その姿は私たちが期待するようものではありませんでした。イエスはイエスは馬ではなくロバに乗ってやってきます。世の支配者としてではなく、人々に仕えるしるしとするためです。イエスは、きらびやかな大都会、荘厳な神殿には生まれませんでした。片田舎のベツレヘムで名もない大工と町娘の間の子として生まれました。イエスは安全で清潔な病院では生まれませんでした。不潔で貧しさの象徴である飼料おけに生まれたのです。王としてはあまりにみすぼらしい期待はずれな救い主だったのです！

今日はもう一箇所、イエスが十字架刑に処せられる裁判を受ける物語を聞きました。この物語によればローマの総督ピラトはイエスに何の罪も見いだすことが出来なかったようです。しかし、十字架につけられて殺されてしまいます。なぜでしょうか？人々が望んだからです！イエスはローマ軍と戦うことなく、無抵抗で逮捕されます。人々はそんなイエスに失望します。ローマからの解放を期待して、イエスを熱狂的に迎えた民衆は、今度はイエスをなじり侮辱するようになります。そしてピラトに要求した！「あの男を十字架につけろ！」イエスを殺したのは、人々の失望であり、過度で的外れな期待だったのです。イエスの罪状書きには「ユダヤ人の王」と書かれました。けれども、その言葉は現実のものとなります！十字架でみじめに死んだイエスが、復活して神の子だったことを示されます。彼は本当の救い主だったのです。人々の期待した栄光と力に溢れた王ではありませんでしたが、貧しくて質素でしかし誰よりも他者の痛みが分かる「やさしい」王さまだったのです！

私たちは今日、改めて救い主がどんな王だったのかを心に留めたいと思います。サウルのように、勇ましく戦う王ではありませんでした。ダビデのように、詩を詠み、堅琴を奏でる美しい王ではありませんでした。ソロモンのように深い知恵と多くの財産を誇った王でもありませんでした。貧しく、田舎者で、ロバに乗ってやってくる王さま。戦うことはせず、人々を癒すばかりで、自分を十字架から降ろすこともできなかった王さまです。でも、この人こそすべての人を罪から救う本物の王さまだったのです！私たちはこの方から癒しと救いとホンモノの神の義への招きを受けているのです！

今日のエレミヤの言葉は本当に現実の課題でしょう。そのことを3つ挙げたいと思うのですが、先週、野田和人先生がご自身の話をされました。ブラジルにそろばん講師として住んでいた時は、ブラジル社会のいびつさからは目をそらして楽しく過ごしていたが、牧師として召された時に、修士論文のテーマとして改めて貧しい人々の苦しみや呻

きと向き合わされた、と語っておられました。預言者アモスを引用されていましたが、アモスは、イスラエルの国の人々が献げる礼拝を批判しました。弱い者から搾取した葡萄酒で酔っ払い、奪い取った衣を敷いて献げる礼拝は本物の礼拝ではないと断言したのです。彼らは一見礼拝を献げているようですが、それは偽りの礼拝だ！と。アモスの最も有名な言葉です。「**5：24 正義を洪水のように、恵みの業を大河のように尽きることなく流れさせよ**」

ちょうど、23日からフランシスコ教皇が38年ぶりに来日したことが話題になっています。彼は教皇としては初めて南米のアルゼンチン出身で、貧しい家庭だったので幼いうちから会計事務所に奉公に出されて育ったのだそうです。その生い立ちから常に社会に正義をもたらすこと、貧困との戦いをライフワークとしてきました。就任後も、移動には地下鉄やバスを用いて公用車は使いません。食事はほとんど自炊で、誕生日パーティーには自宅にホームレスの方を招いたそうです。洗足木曜日の礼拝では、エイズ患者や少年院の受刑者の少年少女（しかも一人はキリスト教徒ではなくムスリムの少女）の足を洗うなど、次々に貧しい人々と共に生きる教会の姿を打ち出しています。教皇フランシスコが就任して初めてメディアに語った言葉です。「**私は貧しい人々による貧しい人々のための教会を望む**」

世界でいちばん貧しい大統領のスピーチと言う話を知っているでしょうか？ブラジルのリオデジャネイロで行われた国際会議で、何の注目も浴びていなかった小国ウルグアイの大統領、ホセ・ムヒカ氏のスピーチが大きな感動を呼びました！彼は、世界で一番貧しい大統領と呼ばれ、大統領の邸宅には住まず、街から離れた農園で妻と二人で花と野菜を作りながら生活しています。ヨレたスーツと古びた愛車で出勤し、収入の大半を貧しいひとのために献げます。ムヒカ氏は大国の立派な身なりの人々が経済発展を繰り返すなかで、私たちはできるだけ安くつくって、出来るだけ高く売るために、どの国のどこの人々を利用しようかと世界を眺めるようになった。そんな状態で本当に人と人とが手を結べるだろうか？と問います。「わたしたちが挑戦しなくてはならない壁はとてつもなく巨大です。目の前にある危機は地球環境の危機ではなく、わたしたちの生き方の危機なのです。」ムヒカ大統領の言葉です。アモスの語ったことにも通じると思いますが、「偶像礼拝」とは聖書の最も重い罪の一つですが、私たちもキリスト者であっても経済的な利益や発展のみを追い求め、他者の命をないがしろにするならば、それは神ではなく「資本主義」という偶像を崇拝していることになります。「貧乏とは少ししかもっていないことではなく、限りなく多くを必要とし、もっともっとほしがることである」ムヒカ氏の言葉は現代社会に預言者的な響きを放っていると思うのです。

今日の礼拝の最後に、先週は多度津教会創立 130 年、愛光保育園創立 96 年を祝いました。いかがだったでしょうか？今回は明確なコンセプトがあって、参加者一人一人が心から喜ぶこと、一緒に祝える会にすることです。例えば食事の準備などに追われて食事の準備をする人がくたびれ果てるとか、重荷と疲労だけが残るような形ではなく、皆と一緒に喜ぶことでした。もし皆さんの心に残る満たされた礼拝になっていれば本当に幸いです。今回、教会員だけでなく、各関係の方々にも案内をしました。献金報告をご覧いただければ分かるように、本当にたくさんの人が私たちの教会に連なり、関心を持って祈って下さいました。献げても下さいました。私たちはこのことを通して本当に多くの恵みを受けたと思います。恵みを受けた今だから考えたい。私たちはこの恵みをどのようにすることを神さまから求められているのでしょうか？自分たちだけで味わうのでしょうか。内輪で喜んで「はい終わり」でしょうか？そうではないでしょうか！多くの者を受け取った今だからこそ、私たちはこの恵みを分け合う方法を真剣に考えなければなりません。他の人達の痛みを目に向け、必要に応え、祈っていくのです！

先ほどの讃美歌 424「美しい大地は」は讃美歌 21 の中でも異彩を放つ強烈な讃美歌です。フィリピンの女性の神学者エレナ・マキーズが作詞作曲しました。「3 節 種まく者が飢え、刈り取る者が痩せ、紡ぐ者がふるえ、食る者が富む。ためいきの大地を、神は見過ごさない。」1960 年代に書かれましたが、先進国が、発展途上国を搾取し、自分たちの利益のみを追求して栄えている、そのことを厳しく批判しています。この讃美歌は今日の収穫感謝の時に改めて考えるべきだと思います。搾取し、奪うのではなく、神さまが与えてくださった大地の恵みはすべての人と分かち合うべきものなのです。

今週、この説教を作っている途中で矢吹教会から会堂建築のための追加の献金の依頼が来た。友人の教会。福島県で子どもたちの施設をたくさん経営しているという。私は神さまから試されていると思い、すぐに献金を送りました。2 月には今度は外向きの親子コンサートを企画しています。今年の多度津教会の活動覚えておられるでしょうか？社会福祉法人化などで忘れている方も多いと思いますが、私たちはこの 1 年で「アウトリーチ」と言って、社会のためにどんな働きが出来るかを考える年としています。私たちは多くの恵みを受けました。今度は多くの人に、恵みを広げ、本当の福音を届け、神の国を伝えていく番です。共に分かち合い、その喜びを大きなものと出来るように共に祈りましょう！